

一九四五年以前名古屋の博物館発達史ノート

著者	犬塚 康博
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	10
ページ	283-292
発行年	2004-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/12781

一九四五年以前名古屋の博物館発達史ノート

犬塚 康 博

課題と方法

名古屋の博物館発達史に関する研究は、すでにいくつかの成果があり、これを対象とする展覧会も開催されてきた。^② 本稿は、それらに依りながら、一八六八年から一九四五年までの名古屋の博物館史を概観するものである。

これまで、わが国の博物館史研究の関心は、中央の博物館および博物館全体の通史に寄せられてきたと言つてよい。もちろん個別の館園史、地域の博物館史も皆無ではなかったが、事実の列記と中央―全体史で得られた成果による解説がこれに添えられて展開することを常としてきた。しかし、中央―全体史の状況が、果たして地域の状況に妥当するの否か、そしてこの妥当の当否がいかにしてあるのかという問題は払拭されずにある。本稿は、この懐疑を契機に、地域の博物館史研究を中央―全体史からの演繹としてではなく、全体史に向けた帰納の出発点として位置付け、これを試みようとする。

今回の作業は、先行作業と雑誌『博物館研究』の記事に依拠しておこなつた。これは、個別の事例の検討に先立ち、名古屋における博物館発達全体の傾向を把握することを目的としたため、文末の『博物館研究』

に見る名古屋の博物館（抄）^③はそのファイルの一部である。なお一部の事例については、これまでに知り得た地域史資料等により認識の細部を補っている。

結論

この作業の成果として、一九四五年以前名古屋の博物館の動向を、次の三期に区分した。

- (一) 明治期…博物館の登場。
 - (二) 明治末〜大正期…私立博物館の新設と衰退、公立博物館の充実。
 - (三) 昭和前期…公・私立博物館の発展、新規博物館計画の登場。
- あわせて、表「名古屋の博物館の消長」をまとめた。^④ 各期の概要は、以下の通りである。

説明

(一) 明治期

博物館の登場 名古屋に初めて設置された博物館は、工芸博物館であ

る。愛知県令の提唱に財界が賛同し、民間の寄附金と県費とによつて一八七八年に設けられた。全国的にも、早期に実現をみた勸業系博物館である。なおこれの開館以前、名古屋では二度（一八七一・一八七四年）の博覧会開催を体験しているが、一度目の博覧会は全国では京都博覧会（一八七二年）に次ぐものであった。

こうした一八七〇年代の名古屋の動向が、江戸時代後期の日本において最高水準にあり、水谷豊文・伊藤圭介・田中芳男らを輩出した尾張の本草学と、それを背景とした薬品会・本草会・博物会などのいわゆる物産会や、見世物、書画会、開帳などの諸活動を背景にしたものであることは明らかである。つまり、古器旧物保存、殖産興業などのテーマをほらんだ明治初期名古屋の博覧会や博物館は、明治政府の政策のみならず、民間の運動のうちにも理由を有した事態であったということであり、だからこそ矢継ぎ早の展開になったと言える。工芸博物館は、その後一八八一年に公立名古屋博物館と改称し、さらに財政問題を理由として一八八三年に県営の愛知県博物館となった。

この次に登場したのが、名古屋教育博物館（別に愛知教育博物館という表記もあり）である。一八八六年から活動していた随意会（のちに浪越博物会と改称）が一八九一年に設置した。随意会は、江戸時代の本草学の系譜下にあった嘗百社の博覧会が一八九二年頃に終焉するのと相前後して登場したグループで、その中には嘗百社のメンバーも擁していた。名古屋教育博物館は、一九〇一年に尾張徳川家に移譲されて同家邸内に移転した後、一九〇九年に私立明倫中学校附属博物館となる。

ところで、椎名仙卓の研究によると、明治初期の博物館行政には内務

省系と文部省系とがあり、前者は勸業と古器旧物保存、後者は教育を主題とした^⑤。これに照らすと、名古屋には勸業系の工芸博物館があったが、公立の教育系博物館はなかったことになる。ただし、明治前半期、全国における公立の教育系博物館の絶対数は少なく、いずれの存続期間も長くなかったことを考慮すれば^⑥、公立の教育系博物館が名古屋になかったことは特殊な事態ではない。

名古屋教育博物館が、館名に「教育」を有した理由は不明だが、勸業系博物館ではないことの表示、中央の教育博物館を模すことの表示、一八七九年の教育令公布以降一八九〇年の教育勅語発布にいたる国家の教育制度整備動向に対する地域的・民間的反映、などを想定してよいかもしれない。いずれにしても、名古屋に公立の教育系博物館はなかったが、民間における展覧会開催と博物館設置という経緯のうちに、その内容が何であれ、少なくともその形式において「教育」という主題性が表出されていたと解することができる。

（二） 明治末〜大正期

私立博物館の新設と衰退 浪越教育動植物苑（一九〇六年）、五二会陳列館（一九〇七年）、名古屋教育水族館（一九一〇年）の開設に見られるように、私立博物館が新規に登場する時期である。地域産品の製造・販売促進のための品評会をおこないそれらを収集・陳列・委託販売する明らかに勸業系の五二会陳列館以外は、いずれも「教育」の語を館名に冠している。しかし、早くも一九一〇年代後半には、名古屋教育水族館の規模縮小移転や、浪越教育動植物苑および私立明倫中学校附属博物館の

廃止など、私立博物館の衰退が訪れた。このうち私立明倫中学校附属博物館の廃止は、同校が愛知県に移管されて愛知県立明倫中学校となるに際してのことであった。

公立博物館の充実 これまで唯一の公立博物館であった愛知県博物館は、一九一一年に新築移転・改称して愛知県商品陳列館となり、「東洋第一の商品陳列館」を標榜するにいたる^⑥。また、浪越教育動植物苑の動物が名古屋市に寄附され、これを転用して名古屋市鶴舞公園附属動物園が一九一八年に誕生する。名古屋市立としては最初の博物館であった。

(三) 昭和期

公・私立博物館の発展 狭隘な敷地と施設によつて運営されていた市立名古屋動物園が、一九三七年、広大な敷地の東山公園に移転して名古屋市立東山動物園となり、併せて「東洋一の温室」をもつ名古屋市立東山植物園が新設された。動物園では全国初の無柵放養式導入となり、植物園でも温室の鉄骨の電気溶接など、当時最新の思潮や技術が採用されている^⑦。こうした進取性は、一九三五年に新設された徳川美術館が、保管・公開機能をそなえる博物館建築を実現したことに共通して認められる。

そして、これら新設博物館の名称に「教育」の語はない。このときすでに、勸業系博物館は「道府県市立商品陳列所規程」（一九二〇年）というスタンダードを確立して脱博物館化しており、この規程に即して愛知県商品陳列館も愛知県商品陳列所（一九二一年）に改称していた。ここでは、明治以来の博物館のテーマのひとつであった「勸業」は失われ、

新設の博物館があえて「教育」を冠する必要はなくなっていたのかもしれない。もしくは、勸業でも教育でもない範疇へと博物館の外的機能が変化していたとも考えられる。

この事態に象徴されるように、名古屋市立東山動物園、名古屋市立東山植物園、徳川美術館の三館園は、もはや〈明治〉ではなく、文字通り〈昭和〉を体現していたと言つてよいだろう。

新規博物館計画の登場 一九三〇年頃、名古屋商工会議所による名古屋博物館計画や、名古屋郷土会による郷土博物館計画が登場する。計画の要求主体はそれぞれ経済界と「学」界であり主張の動機も主旨も異なるが、ここでも明治の「勸業」と「教育」という概念はみられない。「歴史」という主題が登場し、これをめぐつて多様な要求が顕在化した時期として了解できる。

また一九三七年、名古屋汎太平洋平和博覧会の展示館「近代科学館」を再利用した科学博物館計画が、名古屋市によつて公表されている。「科学立国」がスローガンになっていく時代の産物とも言えそうだが、この時期、自然科学者のイニシアティブのもとで求められていた中央の博物館とは似て非なるものであった^⑧。

議 論

(一) 行政と非行政

経営主体に視軸をすえるとき、一九四五年以前の名古屋における博物館の推移は、基本的に非行政から行政へと移行していく過程のうちにあ

つたと総括してよい。^⑧ たとえば一九三一年、徳川義親は「新たに財団法人黎明会を起し、それによつて美術館を建設し、旧藩邸秘蔵の宝物全部をこれに収め、その俣これを名古屋市に寄附する」と発言しているが、これが仮に一時のリップサーブスだったとしても、また義親に固有のレトリックだったとしても、こうした物言いを可能にする社会条件のあったことがうかがえる。

翻つて言えば、これは、博物館に対する行政の主導あるいは積極的な関与が稀薄だったことの証左でもある。すでにみたように、名古屋市立最初の博物館は、私立の浪越教育動植物苑の廃止を受けたものであった。また一九二〇年代後半、名古屋市は「大正天皇即位記念」「市民の精神統一」を掲げて史伝参考品陳列館設置を計画し、募金活動も進めたが実現することはなかった。その理由は未確認ながら、事実はこのとき名古屋の行政が博物館を具体化し得なかったということである。そして時代はすでに昭和となり、昭和大典記念を契機とする全国的な博物館建設ラッシュを迎えていたが、唯一の市立博物館である市立名古屋動物園では拡張計画などの兆しはまだみられない。また一九三一年に名古屋城が開園するが、これも宮内省からの下賜によるものであった。

こうした経緯からすれば、一九三七年の名古屋市立東山動物園・植物園設立は、その建設費や用地を民間からの寄附に負つてはいたものの、名古屋の行政がようやく博物館を主題化し得た画期と言えるだろう。

(二) 国家の語り

ところで、国立博物館の独立行政法人化をめぐつて、北澤憲昭は「日

本の博物館や美術館の歴史は文明開化とともに国家の主導によつて始まった」と述べ、彦坂尚嘉がこれを「鋭い指摘」と評することがあった。^⑨ また滋賀県立琵琶湖博物館は、明治期の博物館を「お上からの啓蒙のための博物館」と概括した。^⑩ しかし、名古屋の博物館発達史を概観する限り、これらの解釈は妥当しない。前者は国家に対する過剰な意識、すなわち裏返しの国家主義であり、後者は国家に対する無意識、すなわち中央館に偏してきた従来の博物館史研究に無批判な通俗的国家主義が感得できる。金山嘉昭が「日本の博物館史を通観して注目すべきことは、特に戦前では国家や政府などによる「官」が博物館や博覧会を主導してきたことである」と言うのも同様に凡愚なのだが、地域の博物館動向を「地方色」として中央の補完物へと矮小化するのは国家主義の骨頂である。^⑪

畢竟するに、こうした解釈は、博物館を国家の語りの中に置いて初めて可能となるものであり、自覚症状なく罹患している例は枚挙に遑がないということであろう。そして実は、生活世界における博物館体験とは、国家―行政の周縁あるいは外部においてこそ生成し死滅してきたのではないか、ということを名古屋の博物館発達史概観は暗示する。この洞察を抱えて地域の博物館発達史を読み替えてゆけば、博物館体験を囲い込み合理化する国家―行政は言うに及ばず、たとえば使命博物館論やNPO博物館論のもとで語られる現下の「市民」もまた、これまでとは異なつた相貌を呈するに違いないと思念するのである。

注

- ① 廣瀬鎮「明治初年における愛知県博覧会事業について」『博物館研究』第三七卷第一〇号、日本博物館協会、一九六四年、一一九頁、井上光夫「名古屋の博物館史—名古屋博物館の登場まで—」『國學院大學博物館學紀要』第二二輯、國學院大學博物館學研究室、一九八八年、三九—四六頁、岸雅裕「尾張医学館藥品物品目録」—「雜品」展示に見る博物館の原点—『名古屋博物館研究紀要』第一七卷、名古屋博物館、一九九四年、一九—二六頁。
- ② 名古屋博物館『名古屋の博覧会』、名古屋博物館、一九八二年、名古屋博物館『再現 江戸時代の博覧会 よみがえる尾張医学館薬品会展 図録』、名古屋博物館、一九九三年。
- ③ 翻刻に際しては、旧字体を新字体に変更した。
- ④ 項目「名古屋の博物館の推移」で、今泉動物園については浪越教育動植物苑設立以前のものとする説と以後のものとする説がある。また、五二会陳列館と愛知県第一師範学校附属郷土室の設置後の推移は未確認である。項目「全国の博物館の設立数」は、「戦前の年代別博物館設立件数と種類別、設置者別内訳」(伊藤寿朗「日本博物館発達史」伊藤寿朗・森田恒之編『博物館概論』、学苑社、一九七八年、九二—九三頁)に依った。
- ⑤ 椎名仙卓『日本博物館発達史』、雄山閣、一九八八年。
- ⑥ 同書、四九—五六頁。
- ⑦ 商品陳列所聯合会『商品陳列所綜覧(第二回版)』、商品陳列所聯合会、一九三三年、五三—六〇頁(伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第七卷、大空社、一九九〇年による)。
- ⑧ 清水謙吾「生きのびた象 戦前戦中の東山動植物園」『博物館史研究』No. 四、博物館史研究会、一九九六年、一一—一頁。
- ⑨ 自然科学者による博物館設立運動については、犬塚康博「大東亜博物館の地平」『戦時下の文学—拡大する戦争空間』(文学史を読みかえる四)、インパクト出版会、二〇〇〇年、二一七—二一九頁、犬塚康博「木場—鶴田博物館論の発生的検討—一九三〇年代後半の自然博物館設立運動」『鶴田文庫研究会編『戦後日本博物館学の展開』(仮題)(投稿中)を参照されたい。
- ⑩ これは、「民から官へ」とは同義でない。たとえば近年の「官民」論者である金山嘉昭は、明治期の博覧会をめくり、「地元の商業・産業界などの有志が主体となり実施した」あるいは「その地域の人たちが主体となる点」に注目する一方で、「国家や政府などによる「官」が博物館や博覧会を主導してきた」ことにも注目する。しかし、「地元の商業・産業界などの有志」が「官」なのか「民」なのかについては思考停止しており、「官民」論の破綻を自己宣告している。本稿における「官民」論の不採用は、金山に見られるような自家撞着、牽強附会、ご都合主義を禁じたことによる。なお本稿本文中で、公・私立、民間などの術語を任意に用いているが、厳密なものではない。したがって、これを敷衍し抽象化・一般化することもしていない。その上で集約すれば、行政・非行政という二項が抽出されるということである。金山嘉昭『日本の博物館史』、慶友社、二〇〇一年、一一〇—二一六頁、参照。なお、金山の「官民」論に対する原理的批判は、金子淳「博物館史のダイコトミー 陥穽としての「官」と「民」『博物館史研究』No. 二二、博物館史研究会、二〇〇二年、一一—二一頁、参照。
- ⑪ ミュージアム・マガジン・DOME+アート・マガジン・LR編集部『国立博物館、美術館、文化財研究所などの、民営化? 決定!』、『エル・アール』七、

書肆・博物誌、一九九八年、五四頁。

- ⑫ 中山ゆかり・LR編集部「ジェイムス仙吉の彦坂尚嘉「白熱の三時間対論／覆（くつがえ）しと「内破」」『エル・アール』八、書肆・博物誌、一九九八年、一九頁。

- ⑬ 滋賀県立琵琶湖博物館『博物館ができるまで』、滋賀県立琵琶湖博物館、一九九七年、一三頁。

- ⑭ 金山嘉昭、前掲書、二一六頁。

- ⑮ かかる国家主義のもとで展開される金山のNPO博物館論とは、紛れもなくボランティア動員型市民社会論の博物館版である。中野敏男「ボランティア動員市民社会論の陥穽」『現代思想』第二七巻第五号、青土社、一九九九年、七二—九三頁、参照。

- ⑯ 犬塚康博「二一世紀初頭日本の博物館風景 「博物館の望ましい姿」とその周辺」『博物館史研究』No.一三、博物館史研究会、二〇〇三年、九—一七頁。

資料 『博物館研究』に見る名古屋の博物館（抄）

①名古屋市立動物園の近況 全園は去大正七年開園以来有志者より飼育動物の寄附せられたものが頗る多数に達し、殊に昨年十一月 聖上陛下大演習御統覧の爲め全園へ 行幸の際は特に全園へ印度支那産猿二頭の御下賜があつたので、全園では早速恩賜動物の爲め、猿舎の新築に着手し、本年一月竣工したのでそれへ収容することにした。全二月には予て築造中の小禽放養室が完成し小禽類をそれへ移す等着々改善の実を挙げて居る。全園最近一ケ年間の観覧者は五十

一万七千余人の多数に達して居る。毎年春秋一回愛玩用鳥獣の品評会を開催し、特に今秋は御大典奉祝名古屋博覧会の家畜館を園内に建設することになり、小家畜愛玩用鳥獣の出品多数の見込である。（第一巻第四号、一九二八年、一三頁）

②名古屋教育水族館 同館は明治四十三年に創設されたもので、名古屋市南区東築地に設けられて居る。建設及び改築に要した経費は七万円で、一ケ年の経常費は一万五千七百円である。最近一ケ年の入場者総数は十三万二千三百人の多数に達し、可なりよく利用されて居る。（第二巻第八号、一九二九年、一四頁）

③名古屋市の博物館計画 外客の誘致策としてのホテル建設については、名古屋市当局及び商工会議所方面に於いて、それぞれ研究が行はれ、大岩市長を中心に目下この計画は具体化しつつあるが、然し単にホテルの建設だけでは、今日の如き何等観るべきものなき名古屋市に外客の足を留めしめることは不可能であり、また外客のみならず、内地に客を迎ふるにも殆んど何等の興味を惹かない有様で、都市の品位の上からも、観光客の足を留めしむべき必要があるといふので、最近伊藤商工会議所会頭を中心として、名古屋博物館建設の議が持ち上り、会議所事務局に於いても、これが調査研究をなすことになった。その方法としては名古屋離宮の一部を借り受けて、此处に博物館を建設し、名古屋地方を中心に元亀天正以来の歴史的地理的根柢を背景とした徳川文化を系統的に現はさうといふのである。（第三巻第二号、一九三〇年、一四頁）

④名古屋市の博物館計画 名古屋市の博物館建設問題に就いて、愛知新聞は左の如く報じてゐる。

名古屋市に史伝参考館建設の議は名古屋市民の精神的統一を図る上に最も効果あるものとして、今から六年前大正天皇の御即位記念事業として計画され予算中にも史伝参考品陳列館建設積立金の項目を設け寄附金を積立ててゐるが、現在約三万八千円の積立金あり、三十万円の建設予算に隔たること遠く果して何時になつたら実現するのか全く見当がつかぬ状態にある。而も市長更迭等の結果大岩市長は前任者の計画として殆んど忘れた如く、果してその意志あるや否やさへ判らぬ状態で、昭和五年予算には財源なしとの理由の下に何等なすべきものなき折柄、斯かる寄附金に因る事業にこそ努力を傾注すべきに、殊に大岩市長は事毎に精神的方面のことを力説してゐる態度に観るも、此際この方面に責任ある態度を呈し、跡仕末に努力すべきであると唱へられてゐる。一方名古屋商工会議所会頭伊藤次郎左衛門氏は、名古屋に郷土の歴史に関する博物館を設けると主張してゐる点に鑑みても、大岩市長にしても平素の言の如く真に市民精神の緊張と統一を念ずるならば、寄附金の募集も敢て難事に非ず、徒らに無為に過ごすはその意志のなきものを証明するもので、平素の言動に矛盾するものではないかと見られてゐる。(第三巻第四号、一九三〇年、一一一―一三頁)

⑤名古屋の郷土博物館計画 郷土の考古学的研究は最近非常にやかましくなり、東京では柳田国男氏が中心となり、新渡戸博士が会長となりて、東京郷土会を組織し、鳥居龍藏博士を始めとし、斯界のオーソリチーを集めて研究されてゐるが、愛知県でも数年来各地の古墳、古寺その他から珍らしい考古学資料が続々と出土し、愛知県を始め、美濃国地方には未だ手をつけられない考古学的また郷土芸術的のものが沢山あるので、これらをまじめに研究して、郷土のために尽さんがため、今回石川栄耀氏が東京郷土会と連絡をとり、名古屋郷土会

を組織し、会長に田中名鉄局長を推し、会員としては県下に於いて造詣深い人々を加へることとなつた。かくてこれが第一回創立会は去る二月四日夜名古屋市東区大曾根町の田中名鉄局長官舎に開かれ全員出席し、三河万歳の研究家名倉平三郎氏から三河万歳の濫觴につき詳細な発表があり、ついで会としては郷土博物館建設のため猛運動を起すことゝなつた。(第四巻第三号、一九三一年、六頁)

⑥名古屋市に美術館建設 さきに時価百万円に上る名古屋市東区大曾根の宏大な藩邸を名古屋市に寄附した尾張徳川家の当主義親侯は、去る十月十九日夜名古屋市公会堂における県市商工会議所聯合主催の招待宴の席上に於いて、新たに財団法人黎明会を起し、それによつて美術館を建設し、旧藩邸秘蔵の宝物全部をこれに収め、その俣これを名古屋市に寄附する旨発表した。黎明会の組織については目下手統中であるが、美術館に展観される宝物中には、徳川家康公の陣中で愛用された什器類、豊太閤が朝鮮征伐の際分取つた珍品をはじめ、その他貴重な文献等多数あり、これによつて三百年來尾州徳川家に伝はる宝物什器が愈よ世に出ることゝなつた。(第四巻第一号、一九三一年、五頁)

⑦名古屋城旧御殿公開 名古屋城旧御殿はいよく十二月一日から一般に公開することに決定し、この旨を二十八日告示した。拝観料は天守閣拝観をふくみ、一人につき金一円で、拝観は御殿東入口から玄関に上り、廊下伝ひに各室の建築、美術を鑑賞し、下御膳所より出る順序になつてゐる。拝観時間は四月より十月までは午前八時半より午後三時半まで、十一月より三月までは午前八時半より午後二時半まで、但し天候不良の際は停止することになつてゐる。なほ拝

観の各室は玄関、表書院、対面所、上洛殿、黒木書院、上御膳所、梅の間等である。(第五巻第一号、一九三二年、六一七頁)

⑧徳川美術館進捗 昨秋華胄界の新人として知られてゐる旧尾張の藩主徳川義親侯爵が、財団法人「黎明会」を組織し、生物学研究所、図書館、美術館等を建設して社会に貢献する決意を公表し、当時社会に一大センセーションを巻き起したが、美術館は名古屋市東区大曾根町の旧邸内三千坪の地区に建設し、徳川家伝来の古器、珍什、美術品を挙げて美術館に保存陳列し、一般に公開する計画で、その準備は着々と進められ、建築物の設計を募集したところ応募者百八十三名に達し、本会理事帝室博物館総長大島義脩氏をはじめ、工学界の大家が審査の結果、今回左の如く決定した。

一等 (名古屋)

東京工科及び日本大学工科出身 佐野 時平

二等 (東京) 米国工学士 小野 武雄

三等 (東京) 工学博士 岸田日出刀

同建築設計図案は、陳列館は間口九十八尺、奥行三十八尺、一階吹抜建築で、鉄骨鉄筋コンクリート建、外部は耐火石造張り、屋根は日本東瓦葺、床石造、腰大理石、室内四周に四尺の凹所を設け、これに陳列棚を配列し、中央にはガラス張り陳列棚を、而して採光は屋階窓採光式で、館の後部両翼にも間口三十尺、奥行二十尺の小陳列室を設け、甲冑武器等特別品の陳列所に供する。館の左方に間口三十尺、奥行九十尺の二階建倉庫を設け、陳列館と倉庫との聯絡を保ち、これ等の建築は何れも鉄骨鉄筋コンクリート建で、中央部に事務所、美術品手入室、応接室、宿直室、地階に予備室、倉庫、小使室、また事務所前方

二十間を隔て、機関室を設け、地下道にパイプを通して事務所の地下室に到り、こゝより暖空気を陳列館のコンクリート二重壁間に送つて建物の湿気を防ぎ、且つ館内を暖める設計である。右に關し一等当選者佐野氏は左の如く語つた。

美術館の性質上、様式につき研究した結果、旧徳川邸内に建て風致を害せず周囲とよく調和した建物と思つた結果、古代趣味を發揮した近代東洋様式で特に留意した点は美術品等に湿気が大禁物であるから、これを防ぐ方法として陳列館のコンクリート二重壁の間にホット・エヤーを送る設計をしたことなどはこの設計中特に注意した点である。(第五巻第四号、一九三二年、六頁)

⑨名古屋の森林公園内に植物園 かねて名古屋市では、東郊の大森林公園内に植物園建設の計画中であるが、市当局では東京、大阪、京都の三都植物園の調査も終へ、それらの長所をとり、日本一の大植物園にすべく、敷地は公園内の十萬坪を充て、珍奇な熱帯植物用大温室、高山植物の大花壇などを築造し、桜、紅葉数万本を植ゑるなど、東邦ガス会社よりの寄付金二十五万円を事業費に充て、種々具体案をねつてゐる。(第七巻第七号、一九三四年、一八一—一九頁)

⑩尾張徳川美術館竣工 かねて名古屋市東区徳川町に建築中の尾張徳川黎明会美術館は、このほど漸く竣成、来る陽春の候を俟つて開館式を挙げる筈である同館の建築様式は当主徳川義親侯の希望に基づき、城廓の気分を多分に取入れたもので、構造は鉄筋混凝土平屋建、大小三室からなる陳列場、事務室、応接室、美術加工室、宿直室、予備室、物置、写真室等を含む事務所、これに陳列場と事務所とを連絡した二階建の倉庫があるが、これは特に列品運搬と破損防止から床高を同一に、また棚をも低くし、防温の目的からは外壁と内法で約二

尺五寸離れて木造壁を作り、さらに保存の目的から一切窓を設けず、一日を通じて太陽熱を比較的等分に受けしめるやう、特に南北に長く建てられてゐる。

この外に棟には瓦とおなじ濃緑色の鯨を相對峙せしめ、また室内の天井からは燈籠を象つた優雅なシャンデリヤを吊し、玄關の床石には雲と水を配し、雌雄の鯨が「明」の時を象つた玉を凝視するさまをモザイクで現はし、なほ腰には陶器で葦手模様を嵌め込むなど、あらゆる技巧が施されてゐる。(第八卷第一号、一九三五年、一四頁)

㊦名古屋動物園の移転 現在狹隘を告げる同動物園の移転拡張は多年の懸案であつたが、愈々十・十一年度二ヶ年継続事業として、名古屋市東山公園の入口正面四万八千坪の地に建設費のみで五十五万三千円を計上し、昭和十二年度春迄に設工の予定で大規模の築造に取りかゝることになった。(第八卷第一二号、一九三五年、七頁)

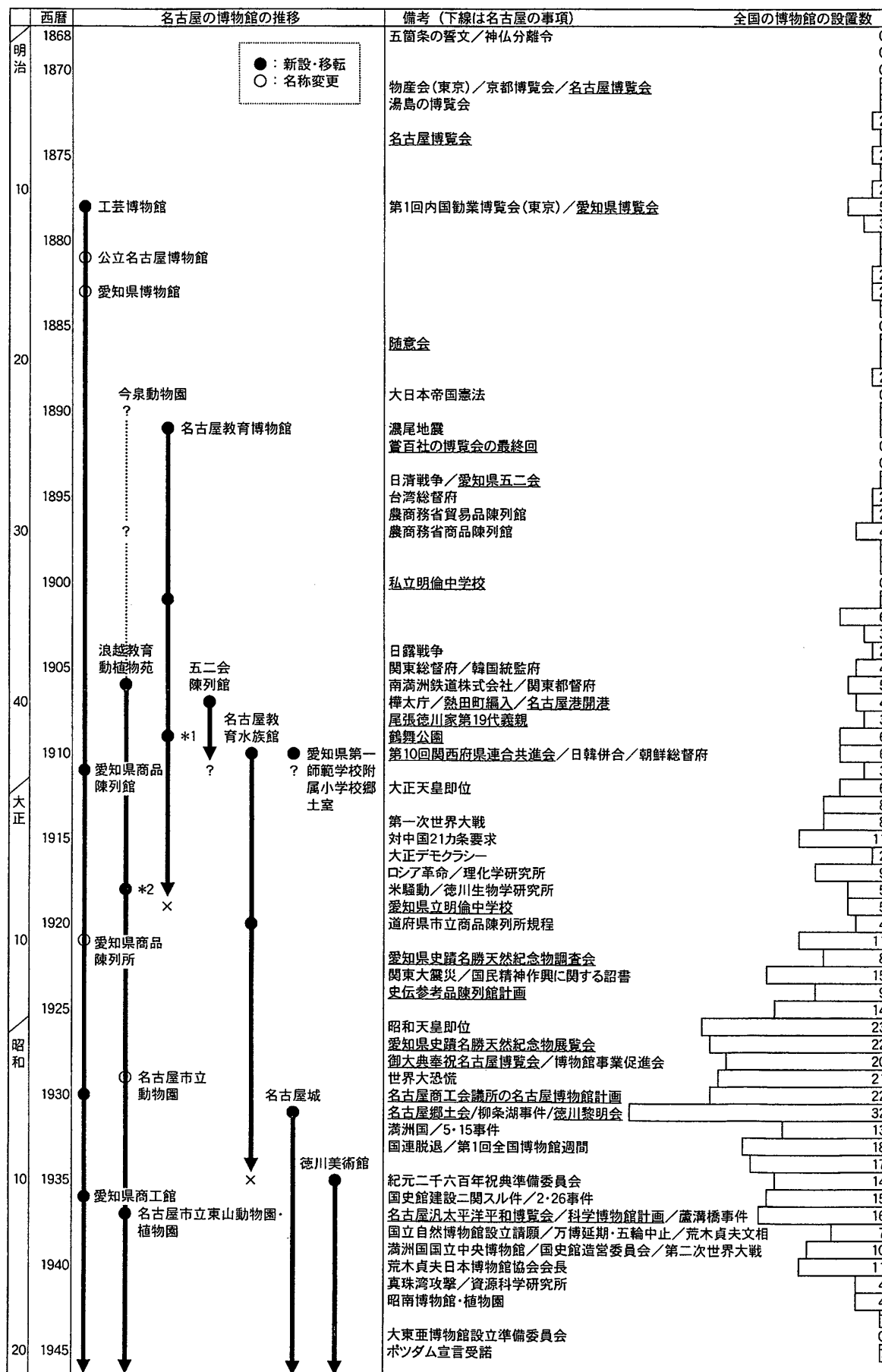
㊧名古屋に科学博物館 名古屋市では汎太平洋博覧会を機として閉会后、その出品物を利用して科学博物館建設の議が起り五月十七日大岩市長等一行は汎太平洋博覧会の実地視察を行ふた。(第一〇卷第六号、一九三七年、八頁)

㊨名古屋に科学博物館設立 去る五月三十一日を以て終了した汎太平洋博覧会を記念するため名古屋市では近代都市としての同市に欠けてゐる科学博物館設立の議が起り、同博覧会の呼物となつた近代科学館の大地球儀をはじめ科学的に優れた出陳物計二百八十一点を集めて、まづ中村公園内東北隅に近代科学館の建物を移し、従来市当局で蒐集した貴重資料をも加へて陳列公開する事にし、

一方将来恒久的な科学博物館の建設をも計画されてゐる。(第一〇卷第七・八号、一九三七年、八頁)

㊩新装の名古屋市東山動物園 本年二月鶴舞公園の旧園から移転を完了、名古屋市東端、東区田代町東山公園入口に五万五百坪の大地域を擁する同園は近代的動物園の粹を蒐め、最新の設計と規模の豪壯華麗を以て去る四月一日から一般に公開された。こゝに同園の最も誇とするものは獅子の無柵式放養場であつて、在来の鉄檻を廢し、背景に峨々たる岩を配し前面に深き濠を設くる等の装置に依つて安全にしてもしかも視野を遮るものなきやうにした。なほこの放養場は原地の風光を模し動物の生態を彷彿せしむるものであるが、同園ではこれを中心としてその前方の麓に縞馬・羚羊・駝鳥の各放養場を置き綜合的に亜仏熊、象、キリン等々にも同様の施設を実現されたい。(第一〇卷第九号、一九三七年、七頁)

表 名古屋の博物館の消長



*1 私立明倫中学校附属博物館 *2 名古屋市立鶴舞公園附属動物園